

# 家父長制の危機と真の家庭思想に関する研究

キム・ミンジ（鮮文大 文鮮明研究院 研究教授）

- I. 序論
- II. 家父長制の危機
  - 1. 家父長制社会と性別分業の矛盾
  - 2. 家父長制社会の変化と家族の危機
  - 3. 家庭の危機に対する新保守主義の対応
- III. 統一思想の真の家庭の思想
  - 1. 真の家庭の思想の基礎
  - 2. 家父長制の根本的な代案
  - 3. 真の家庭を通じた平和世界実現

## I. 序論

文鮮明・韓鶴子総裁の平和思想の根幹は‘理想家庭を通じた平和世界実現’ということができる。文鮮明先生は“世界平和に向かって行くことができる礎石を置くのも家庭であり、世界平和の道を破壊できるのも家庭である”と言われ、“人類にとって最も至急に必要なのは、真の父母による真の愛の革命”による“根本的な変革なしに人類の幸福や平和な世界は望むことができない。今日の諸問題は真の父母が中心になった真の家庭主義、神様の真の愛主義によって整理されなければならない”と何度も強調された。

‘家庭が平和世界の根幹’という思想は家庭に関する儒教の観点と似ている面がある。儒教は家族を最も原初的な社会的単位と見て、すべての関係の始まりを家族と見て、家族共同体を人生の中心と見た。‘家和万事成’で代表される儒教的価値は個人より家族を優先視して家族の和睦をすべての出発点と見たのであった。

『大学』の‘修身齐家治国平天下’で強調する君子の徳目とは修身、次に家庭に言及する。先ず、体を正しく整えた後に家庭を世話し、その後、国を治めて、天下を経営しなければならないという意味で、修身を基礎にして、家族、国家、世界まで段階的に自身の能力を広げていくことができるという意味である。ここで各段階は分離的な段階というよりは互いにかみ合わさって連結しているものと理解され、その実在では修身は家庭の平和を通して自然に具現されるものと理解された。

機能主義的社会学の観点でも、家族は生物学的要素に基づく自然的制度として愛が充満した安息所であり、洞察的であり、不変なる共同体として神聖視される。自然発生的で普遍的な社会制度として、家庭は社会的・道徳的に望ましい基礎だということである。

しかし女性学者たちはこのような家族を理想的な体制であると強調する観点

を前端的に反駁する。特定家族の形態を生物学的なものに見なして自然的だと見る見解はイデオロギー的であるというのである。むしろ家族の現象的变化はすでにかなり前から歴史的に持続してきたし、男女の性別分業に基づいた家族形態はイデオロギーの構成物であると指摘する。特に、家庭を安息所として作らなければならない情緒的役割を担当してきた女性には家庭は安息所ではなく、もう一つの労働の空間であるのみで、家族イデオロギーは女性に性差別的であるというのである。

家族は自然的なものではなく、イデオロギー的であると女性学者たちが指摘するように、現代社会の中の家族は家族イデオロギーが危機を迎えて急激な変動と解体を迎えている。核家族モデルの支持基盤たる中産層の弱化とともに、独身世帯の増加、高い離婚率、低出産率はもちろん、親が子供養育者としての役割を喪失したこと、夫婦関係の不安定化、巣としての家庭の役割の減少などが、資本主義時代の家族変動の兆候として現れている。

家族が解体し、崩壊する危機の兆候が増加するや、このような現象を收拾するために、1970年代に米国で新保守主義が登場し、家族の価値を強調しながら、幸せで和やかな家庭を強調している。1977年にドブソン(Dobson)が作ったキリスト教の運動団体である‘フォーカス・オン・ザ・ファミリー(Focus on the Family)’は伝統的な価値と家族制度を保存する運動をしているが、このような福音主義信仰運動に影響を受けた韓国キリスト教界でも“家庭を正しくたててこそ社会が回復し、国が強くなるという哲学”を叫び、家庭の価値を強調してきた。

しかしポスト・モダン解体論者たちは新保守主義の叫びは変化する家族の現実に対する代案にはなれないと反駁する。彼らは家族の構成や関係は多重的であり、時には矛盾的存在であるまでに、現状では家族に対する単一的観念だけでなく、普遍主義的家族理論の目的や必要性自体も解体されなければと主張する。

これらによれば、いかなる家族理論もそれが固定されている家族についての現在と未来の思考を導くことはできない。

そうとすれば、女性学者たちの批判のように、家庭は女性に性差別的抑圧と疎外の空間に過ぎず、ポスト・モダン解体論者たちの指摘のように、すべての家族理論の目的や必要性は解体されてこそ当然なものであるのか？ 文鮮明先生が主張した神様の真の愛に基づいた真の家庭主義は危機に処した今日の家庭に代案になるのであろうか？ 本研究は家父長制の危機に対する真の代案として、文鮮明先生の真の家庭主義が持つ含意と現実的課題を明らかにしようとする。さらに、真の家庭思想を通じた平和世界実現の可能性を展望してみることが出来るものである。

## II. 家父長制の危機

### 1. 家父長制社会と性別分業の矛盾

文鮮明先生は真の愛の本体である神様が父母の心情で人間始祖アダム・エバを愛の対象である子女として創造されたとおっしゃる。神様の真の息子娘として創造された人間は真の男、真の女として成長して、真の夫婦となり、真の家庭を作って理想的な国と世界を成すべく創造されたのである。すなわち、神様の真の愛を中心として理想的な家庭、さらに理想的な世界を完成することが神様の創造理想であった。したがって人間において一番尊いことは真の愛を中心に真の家庭を作ることであった。

しかるに、真の愛は知識として知るのではなく、経験を通して獲得し、体験を通して知るようになる。言葉や文、あるいは一般教育を通して体得できるのではなく、生活を通してのみ完全に体得できるので、両親の愛を受け、子女の心情を体得しながら育ち、兄弟どうし愛しながら成長し、真の人格を備えた完成した真の人間になれば、夫婦生活を通して互いに愛することによって、夫婦の心情を体得するように創造された。すなわち成長期間に生活と経験を通して、子女の心情、兄弟の心情、夫婦の心情、父母の心情などの四大心情を段階的に体得しつつ、神様の真の愛を体恤(たいじゅつ)するようになっていたのである。

しかし人間は神様のこのような御心を知ることができないまま、自分を中心とした利己的な愛の関係を結んで墮落し、本然の真の愛を体恤できなくなってしまった。これによって心と体の調和、男性と女性の調和が破られることになり、葛藤と紛争が起きるようになった。最初の人間が真の愛を見分けることができず、衝突的で矛盾的な愛を体恤してしまったためである。誤った愛の関係によって、家庭は幸福と平和の起源ではなく、分裂と不平等の起源になってしまったのである。

誤った家庭の秩序は家父長制として定着した。男性と女性、女性と女性、男性と男性の間の権力に基盤を置いた家父長的關係は、階層、性別、人種間の優越性と権力の状態を維持させるのに使われる社会的システムとして拡大した。

家父長制は性別に基づく差別の根源になり、男性らしさと女性らしさに関する基準になった。家父長制のシステムの下で女性は女性的な行動と定義される従順的で受動的な態度に対して補償を受けるようになった反面、男性は攻撃的で男性的な行動で補償を受けた。さらに、女性を男性に比べて脆弱で感情的、本能的な存在と規定して男性に頼って統制を受けるようにした。このような認識は男性の抑圧と暴力を正当化した。

西洋の法は19世紀まで家父長制のイデオロギーによって支配された。ブラックストーン(Blackstone)は、西欧の家父長制が女性は結婚と同時に男に属する存在としてのアイデンティティを持つようになり、婦女身分制度(Coverture)により、夫は妻のすべての法的権利を代弁する存在に置いたと指摘する。婦女身分制度は家庭内で夫に従属した女性の地位を象徴的に見せる制度として、女性の法的地位は夫の保護下にある財産と同じ概念に転落したことを意味する。

東洋でも三綱五倫で代表される儒教的秩序の中で、家父長的イデオロギーが家庭を支配した。夫と妻は尊卑の関係にあり、年齢による序列関係の強調は女性の従順を二重に強化した。法的権利を喪失した女性は三従之道のような独特の序列構造の下に置かれていた。大部分の女性は年上の男性と結婚しながら、年齢の差と男女の役割の差異によって、夫と同等な人格体として存在できず、家事に対する義務と夫に対する道理、母としての役割、そして年長者に対する態度を強要されるようになったのである。

男性は幼い時節から学問を習いながら、人格修養を始め、家族、国家、天下を治めることを要請されたが、女性は学問探求に制限を受けただけでなく、賢母良妻の道理だけが要請された。男性と女性に差別的に適用される倫理規範は男性と女性の差別的役割に起因する。夫/父は家族の生計扶養の責任を負い、公的社会で家庭を代表する役割をするのに比べて、妻/母は家事労働と子供養育の責任を負い、家庭という私的領域に限定された役割に留まった。

性別構造化された家族において、男性は家族の代表的な家長として権威を付与され、家族に関連した事案の決定権を持ち、家族を統率するという名分の下に、時々子供や妻を虐待して暴力を使うこともあった。男性に特権を付与する家父長的結婚と家族は家族内での平等な権力関係を保障できなかったのである。

まだ残存する家族内労働の不均衡な分配は女性に不均衡な分配につながっている。第一に、女性は家庭内の役割によって自己の発展の機会を持つことができない。女性に賦課された子供養育の役割は女性に大して、仕事または社会的活動をあきらめるようにさせ、母性の優秀性として美化される。女性は妊娠出産および養育に投与する時間が長期化するほど、順次社会的な能力を喪失するようになり、自己発展の機会を失わうようになる。

第二に、女性の家事の役割には社会的経済的補償が後についてこない。無報酬の家事は女性を経済的に無能にさせ、夫に依存するようさせる。のみならず、家事と子女養育は仕事と見なされず、これを担当する主婦は何もしていない人と規定される。このような社会的規定は女性を家族内でも家族外でも劣等な位置に留まるようにする。それ故、女性の社会経済的地位は夫の地位によって決定され、女性の権利は夫を通して保障される。

第三に、資源分配に関連して、家族の財政的資源と見ることができる所得が分配される方式も不公平である。多くの場合、妻が就職してもしなくても関係なく、住宅や不動産の名義は夫のものであり、法の制度はこれを後押ししている。不動産購入時に所得証明を要求したり、アパート分譲を所帯主にだけ制限する税法は、妻が財産を所有することのできる機会を根本的に遮断するのである。

## 2. 家父長制社会の変化と家族の危機

1960年代以後、本格的な産業化が進行しつつ、家父長制もまた外形的な変化

が始まった。産業化にともなう家族構造の変化により、家族と生産あるいは家庭と仕事場が分離して、家族の経済的機能が縮小されつつ、外形的な変化があるように見えたが、養育と家事労働は相変わらず家族の主な機能として残ることになり、家庭と社会の分離の中で性による労働分業は相変わらず維持されたのである。

産業化とともに家庭は仕事場と分離しつつ、私的空間に規定された。家庭は家族構成員が相互情緒的親密性を分かちあう空間となり、夫婦間の親密性が過去のどの時代よりも重要な課題として注目され始めた。安息所として家庭のイメージが強調されつつ、愛情と和合に満ちる家族構成員間の情緒的な面が浮び上がった。また家族関係で発生する強い情緒的連帯感が個人の心理生活で重要な役割をして社会内のイデオロギイ的規範を確立し、家族共通の利害基盤として作用することになった。しかしこれと同時に、家庭を安息所として維持するための女性の役割が浮び上がり、家族の間の不平等と葛藤もまた深刻となった。

社会学者たちはこのように核家族内で夫と妻が分離した役割を担当することを生物学的特性に基づいた平等な機能的分業と見た。性別構造化された家族内で発見される分業を少なくとも一般的な社会的原則で見れば、公平な分業を自然的または社会的必要性によって維持するほかはなく、個人の立場では合理的な選択である。このような選択により、人々は家族の中で情緒的欲求——愛・安定感・親密感・性愛——を充足し、女性は全てのものを愛と感じて包容する安息所の役割を遂行するようになる。

愛と親密感を分けあうことができる場所として家族の役割が強調されるが、その情緒的欲求の充足が外部とは断絶したまま閉鎖的に成り立つために、情緒的な役割を担当しなければならない女性の立場では家庭が疎外と抑圧の場になったりもする。孤立した家庭で家事と子女養育の役割だけを強要される女性たちは、疎外された人生を夫と子供の成功を通して補償を受けようとする家族のための盲目的な配慮と愛は母性イデオロギイの中で美化された。

しかし男性家庭もひとりだけの経済活動では安定した収入構造を確保しにくい経済構造に変化しつつ、このような母性イデオロギイも危機に瀕することになる。韓国の場合、1997年末の経済危機以後、IMF体制下で行われた全面的構造調整と大量失業は女性が働きに参加するようにさせた。すなわちそれまで家族扶養の責任を引き受けていた家父長たちの位置が不安になり、その過程で専業主婦として生きてきた女性たちが自然に家庭の役割をする場合が多くなったのである。これによって仕事場は男性、家庭は女性という産業化時代の典型的家族モデルが揺れることになった。

問題は家庭の収入だけでは家計を維持できない経済構造の変化によって既婚女性の就職が不可避になるや、家族内の性役割区分意識はこれ以上維持するのが難しい状況に直面したことである。職業女性たちは職場日と家事日を併行する二重労働の過重な負担により、家族の情緒的要求に耐えがたいのが現実である。相変わらず理想化された家族観は家庭の情緒的役割を強調しつつ、女性にさ

らに多くの役割を要請しており、これら女性にそして彼らの保護を受けなければならぬと信じる家族たちに安楽感を与えるよりは葛藤の要因を提供することになった。

これに比べて、男性の家事労働参加は少しずつ拡大している。過去に比べて、夫の家事参加時間が増加しているという研究が出てきているが、夫が参加する家事の種類は非常に制限されており、家事に参加する時間も一日平均 1-2 時間に過ぎないことが明らかになっている。特に、家族を見守る情緒的役割は相変わらず女性が専門担当しており、これは衣食住に関連した家事の負担が減少するとしても、女性たちには身体的・心理的に非常に過重な負担になる。子女養育を女性が専門的に担当することは女性たちが就職をはじめとして、家庭外での活動を選択するのを難しくする。

その結果、結婚と出産をあきらめる女性が増加しており、離婚率がまた前例なく高く現れている。バーナード (J. Bernard) が指摘したように、“主婦になるということ自体が女性を病気になるようにしており”、現代女性たちは主婦や母になることをあきらめる時代になったのである。

### 3. 家庭の危機に対する新保守主義の対応

伝統的な家庭の価値が危機に処するや社会基盤になる家族自体が崩壊しているという危機感を感じた新保守主義の流れは、西洋では家族の価値を復活する動きとして、韓国では伝統的な儒教的孝の価値が復活する動きとして現れることになった。

特に、米国では 1970 年代以後、強力な道徳的保守主義が登場した。家父長的価値観を土台に男性中心主義的視覚を持った温情主義的家父長主義は、高い離婚率と低下した出産率などの家族の危機を克服するためには、父親の権威が回復しなければならないと主張する。各種社会問題の原因とされた家庭の危機は抑圧的で暴力的な父親が変化すれば解決することができるというのである。

韓国社会でもこのような影響を受けて、誤った権威を行使してきたとして、父親たちの再教育を通して彼らの権威を正しくたてて問題を解決しようとする努力が試みられた。トゥランノ父親学校(オンヌリ教会/トゥランノソウォン：1995 年開設)を筆頭に零落父親学校(零落教会：2004 年開設)、アバロブスクール(愛の教会：2007 年開設)、パドスドゥリム(純福音教会：2008 年開設)等の各教会は教派を超越して、父親再教育プログラムを開設したのである。

父親再教育プログラムは父親たちが今の危機に陥った原因は彼らの抑圧的態度のためだと診断して、軟らかくてキメ細かい父親になることができるように教育する。子女養育と家事労働への参加だけでなく、家族に対する愛を積極的に表現するように誘導することによって、親しくて軟らかい父親になるようにするのである。しかし父親学校のプログラムらは相変わらず‘家庭の頭になること、家庭の祭司長、教会の指導者’としての表象を再現するという批判を受け

ている。夫婦関係をパートナーシップと認識しつつも、位階秩序を放棄しないというのである。家族間の序列的垂直関係を形成する位階の頂点には家父長としての父親がいる。‘頭（かしら）となること’の隠喩は絶対権力の位置を意味し、家族構成員たちは頭の権威下で垂直的位階に従うことが暗黙的に前提となっているのである。

このような温情主義的家父長制に対する女性学者たちの批判は鋭い。温情主義的家父長制は国家政策や資本主義体制の構造的矛盾を隠す効果を産んでいるというのである。経済単位としての家族が男性によって代表される限り、男性に対する女性の依存は持続するほかはなく、女性の疎外と不平等は深化するためである。

彼らは温情主義的家父長主義を越えるためには、認識と態度の側面も重要だが、制度的次元の代案の摸索が何よりも重要だと指摘する。生産と再生産労働に男女の同等な参加を保障する政策と制度を樹立できるならば、性別分業が招来した不平等の条件は克服することができるのである。一緒に家族内で息子と娘、夫と妻、父親と母親が性別を理由で差別を受けることなく、権利・義務・責任を共有して公平な労働分業、資源の公平な分配、平等な権力関係が保障される時、家族の危機は解決することができるというのである。

### Ⅲ. 統一思想の真の家庭主義

#### 1. 真の家庭思想の基礎

家父長制の根本的な問題は女性に対する差別的認識である。東洋と西洋を問わず、女性に対する認識は二つの特性を持った。第一に、女性は男性より劣等な存在であると理解する。女性は肉体的・存在論的・認識論的・道徳的に男性より劣等な存在であると理解される。アリストテレスは女性を誤った男、欠陥ある男と見て、男性より未成熟で劣等だと見た。したがって、“男の勇氣は命令することであり、女の勇氣は従順に従うことに現れる”と言った。

第二に、女性は悪をもたらす危険な存在と規定する理解である。女性は劣等なだけでなく、男性を誘惑してこの世界に悪をもたらす危険な存在である。このような否定的理解は聖書に出てくるエバがアダムを誘惑した墮落説話に基づいている。このような差別的認識は男性/女性を、主体/対象、精神/肉体、天/地のように、二元論的思考につながるようにし、性的不平等を深化させた。

文鮮明先生は神様を女性性相と男性性相を同時に持った根源的存在であり、真の愛の心情で人類を創造された真の父母である、と言われる。2013年から世界平和統一家庭連合は祈る時に、‘父なる神様’と言わないで、‘天の父母様’と呼ぶことを公式化した。

また男性と女性は同等で平等な存在として、神様の性相と形状に似て、心と体、性相と形状の統一体として存在することを明らかにした。男性と女性は神

様の陽性と陰性の形状的実体として、男性は陽性の形状的実体として、女性は陰性の形状的実体として創造された。神様がこのように男性と女性を区分して創造されたことは半分の生殖器が真の愛で一つになることを前提にされたのである。神様の陽性/陰性的実体の男性と女性は水平的に平等で、真の愛で一つに結合するようになれば、神様の陽性/陰性的実体になるように創造されたのである。

文鮮明先生はこのような創造の動機を説明するために、男性と女性がお互いの生殖器の主人である、と強調する。したがって男性と女性は真の愛で夫婦となり、真の平和と幸福の基準となって、永遠で普遍的な真の愛の家庭を作ることができるのである。

また神様は男性を創造された後に、男性を助けるために女性を創造したのではなく、すでに男性を創造される時、女性を‘先有条件’として構想された。男性と女性が創造の先後と関係なく、すでに神様の構想の中で一つになることができるように創造されたために、先/後、優/劣などの関係は成立できない。男性は女性のために、女性は男性のために創造されたのである。むしろ女性は神様の最後の創造物なので、男性よりもっと愛された、とも言われている。

文鮮明先生も男性と女性の間を主体と対象の間として規定する。男性と女性が相対的間を結ぶために主体と対象の間が成り立つのにこの時主体と対象の間は位階的な足跡の間ではなく、分離した二つの存在が一つに結合するための水平的横断の間を結ぶようになる。またその間は固定的ではなく、主体が対象になり、対象が主体になる統合的で立体的な間として成り立つ。

また真の愛の主体と対象の間は、主体が先ず対象のために全てのものを与えて為に生きることを見せる時、対象が自動的に主体のために献身するようになるのである。主体は生命よりもっと尊い愛を対象から受けるために、謙虚に頭を下げて為に生きる態度が必要であると強調する。しかるに、これまで男性が主導してきた家父長的文化は誤った利己的な愛の秩序を作ってきたし、抑圧的で暴力的な方法で対象を支配する主体の家庭になった。文鮮明先生は今や女性たちが先ず自覚し、男性たちが作った誤った愛の秩序や家庭の文化を整理していかなければならない、と宣言されたことがある。

## 2. 家父長制の根本的な代案

現代社会の親族間関係は女性の地位と状況が変化することによって家父長制の限界を克服し、新しい方向を模索してきた。多くの学者たちは産業化以後、親族間関係が家父長制から抜け出して、母系中心に再編されつつあると分析する。

農業を基盤とする伝統社会で家父長的社会は父系を中心とした家系の継承と先祖祭事を中心とする儀礼的間関係と家族間の情緒的きずなを形成し、相扶相助の支援をなす共同体的間関係を維持した。しかし産業化とともに家父長的親族間



係にも変化が起こった。父系中心の親族関係は家系継承と先祖祭事を中心とした儀礼的關係を中心に形式化されつつ、共同体機能は担当できなくなり、家族間の情緒的きずなを形成して相扶相助する共同体機能は母系を中心に形成することになったのである。

このような変化は女性たちが結婚後にも公的領域で仕事をするために現実的に発生する家事と育児などの問題を、情緒的きずなが構築されている女性の父母に分担してもらうようになった。1980年代以後、社会的活動が女性のアイデンティティの一部として構成されつつ、女性の公的領域が拡張され、これに伴って女性たちは家族と仕事の葛藤を解決するために、母系中心の親族関係を形成し始めたのである。

母系中心の親族関係は社会構造の変化による臨時方便であって、家父長制の根本的な代案であることはできない。母系中心の親族関係というものは実際は、女性の公的活動に起因する家事労働を他の女性たる女性の母親が分担する構造である。このような構造は色々な問題を量産するのであるが、先ず不均等な家族関係が形成される。女性は親族関係の中心になりつつ、過度な負担を持つようになる反面、男性は親族関係から疎外されるのである。また父母世代は子供の育児および家事労働まで分担することになり、老年の健康と福祉をおびやかされることになる。

母系中心の家庭で発生する女性の過重な負担と男性の疎外は、相変らず家庭の存立を威嚇し、若い世代が家庭について懐疑的かつ否定的に認識するようにさせている。父系中心の親族関係から母系中心の親族関係に家族関係の中心が移動することは根本的な代案ではないのである。

文鮮明先生は、“(家庭は)愛を中心として一つにならなければなりません。家庭は父母の愛、夫婦の愛、兄弟の愛のみでなく、祖父母の愛と孫の愛を中心として、縦横・左右全体が和合するのです。”とおっしゃった。位階的秩序による形式的で暴力的な家族関係が真の愛の秩序に基づいた情緒的で平等な家族関係へと変化するためには、父親中心でも母親中心でもない真の愛を中心とした家族関係が作られなければならない。すべての家族構成員が自分を中心にする家族関係ではなく、真の愛を中心とした家族関係を持つ時、真の家庭を作ることができるのである。

家父長制の根本的な問題は、男性中心の位階的秩序を打ち出して、家族構成員の自我実現を抑圧し、家族間の真正なる疎通と和合が断絶したところにあった。したがってその代案もまた真の愛の秩序を中心に家族構成員がお互いを愛し、お互いの存在価値が発現できるように支援しながら、疎通して和合しなければならない。

ポスト・モダン解体論者たちが指摘するように、現代社会が多元化されつつ、家庭もまた多様な形態を持つようになり、家族に対して単一的観念で定形化された形態を議論することはできない。しかし家族の価値と必要性まで解体することはできないのである。真の愛を中心にした家族関係は家族の重要性と価値

を十分に説明すると同時に、夫婦を中心に多層的で多様な家族の現実を反映できる家族関係として、代案的な意味を持つことができる。

さらに、真の愛を中心とした家族関係は、女性学者たちが指摘した家族内家事労働と資源の分配問題もまた解決することができる。根本的に家事労働と資源は男性と女性が公平に分担・分配するべきものであるが、これは数値的にだけ計算することはできない現実的な問題を含んでいる。例えば、家事労働の場合、実際、一日の生活として見ようとすれば、男性と女性が公平に分担するという事は家事労働に所要する時間と家事労働の強度によって、異なるように議論されるべきであり、男性と女性が対処する状況によって流動的に変化するためである。したがって家族関係における家事労働と資源の再分配は、両性平等的基準の上に相互の真の愛の関係として相互に配慮して支える時に公平性を確保することができるのである。

### 3. 真の家庭を通した平和世界実現

家父長制は家庭を越えて、世界を維持する秩序として意味を持っていた。男性と女性を中心とする人間に関する認識と人間関係に関する秩序が前提になっているためである。家庭が社会の根幹として重要な意味を持っていたのである。しかし西欧では伝統的に家庭と社会を分離して考える傾向が多かった。

特に、自由主義哲学者たちは家庭は私的な領域であり、政治的権威関係が侵入することのできない場と見なし、社会と無関係なものを見た。私的な領域に属すると見なされる家族内では、愛と世話などの倫理がより一層大きく作用し、合理的で理性的な社会倫理はほとんど影響を及ぼすことはできないと見たのである。制度化された社会の中で家庭は唯一の安息所として機能しなければならないというのである。

しかし家族と社会は分離することはできない。家族は成員間の法的・経済的・性的な権利と義務、役割などが明確に与えられる制度的な側面と、愛・配慮・信頼・連帯性などを土台にした親密な関係の側面をすべて含む。多くの場合、私たちは親密な関係の概念として家族を理想化し、法的な家族の関係を看過するが、二つの側面はすべて社会と有機的な関係を結び、影響を授受するようになる。

家庭と社会の有機的な関係は家庭の教育と文化を通して子供の価値観を形成する過程で端的に現れる。家庭内で父母と子女の関係は価値観伝達効果が最も顕著であり、子女たちは親から多様な領域の価値観を習得することになる。家庭環境を通して幼い時に形成された価値体系は他の状況や条件に処した時に、それにとまなう行動を決定する準拠体制の役割をするようになる。

さらに、青少年期の価値観の形成は同一視と内面化の過程を通して成り立つのであるが、その決定的な力は家族の心理的環境から価値の規範を受け入れて、漸進的に成される。家族は個人に影響を与える社会文化的環境の中で、直接的

で一次的な領域として家族機能は青少年の身体および精神健康に影響を及ぼすと同時に、青少年の健康もまた家族に影響を与え、家族が変化をもたらすことになり、さらに社会全般に影響を及ぼすようになるので、青少年において家族の役割は大変重要なのである。

特に青少年のアイデンティティの発達には家庭、学校、友人関係、メディアなどの多様な環境が影響を及ぼすが、その中で生涯で持続的に影響を与えるのは構成員相互間の結合能力が強い家庭環境である。家庭で民主的で両性平等的な思考を教育された子供は社会の中でも両性性を持った人材として役割をなし、両性平等的な人生を生きていくようになる。

両性性のアイデンティティ感は家族構成員が情緒的連帯感を持って変化と安全性の均衡をよく成すことができる時に高く現れる。過去とは異なり、大部分の家族機能が社会で多く履行されており、家族の必要性や当為性についての議論が提起されているが、相変らず家族構成員らの心理的情緒的満足を充足させるようにする役割は家族であり、青少年の成長と価値判断の土台になっていると見ることができる。

文鮮明先生また家庭が子女たちの内的成長に決定的な要素を提供すると見た。“子女たちの基本的な性稟と生活態度は家庭で形成され、人の情緒と性格の大部分は家族関係を通して体得され、愛情と幸福感が基礎になって形成される”というのである。さらに、序論で提示したように、先生は真の愛を中心とした真の家庭が平和世界の基礎になると何度も強調してこられた。

真の家庭思想は家庭の平和と幸福だけを議論するものではない。家族構成員に対する平等的認識を土台として、真の愛を中心とした家族関係を持てば、他人のために生きていく真の愛の秩序が社会に拡張される。水平的人間認識と真の愛を实践する関係認識が家庭と社会に相互疎通しなければならないのである。

急進主義的な女性解放論者たちは家庭を権力の場所—性の政治が行われる 1 次的な場所だと話す。家父長的家族は社会構成員を家父長的役割や気質・地位・態度などで社会化させ、家父長制を相変らず維持させる主要な機能を遂行するためである。このような主張を逆に適用してみれば、真の家庭思想は社会構成員を水平的に平等に認識するようにし、真の愛で愛するようにする社会の秩序に拡張されるのである。すなわち家庭内で適用される真の愛の原理が家庭の垣根を越えて、社会に拡張されなければならない。

家族が持っている協同性と共有の価値、相互配慮的能力などは家族の境界を越えて社会に拡大されなければならない。現代資本主義制度の下で家族だけが親密性と共有・愛情・相互配慮を独占して隣人共同体として世話する倫理が拡大しなければ、家族はまた他の壁になり、むしろ共同体の発展に障害になる反社会的制度として機能するようになる。ギリガン (C. Gilligan) は養育についての喜ばしき、世話することに対する親和性、あるいは関係指向のような‘伝統的女性主義の美德’に肯定的価値を付与しつつ、このような世話の倫理が正義の倫理と対峙するものではなく、世話の倫理が社会の正義の倫理を補完しな

ければならない、と指摘した。

同時に平等と正義の倫理も家庭の倫理と相互に疎通しなければならない。家庭を私的領域に限定せず、民主的で両性平等なる正義の原理が適用されるようにしなければならないのである。ミル (J. S. Mill) はすでに夫婦間に正義が成立しなければ、政治-社会的領域で正義を成すことができる希望というものはないと言った。多様な家族構成員間の正しい平等と関係の定立が成り立たない限り、多様な社会構成員たちの平等な民主的関係を希望することはできない。

不平等が構造化された家族内で世話の原理は完全になることができず、歪曲される。世話の価値が女性性と家族的価値と親和力が高いとしても、世話がどちらか一方にだけなされる時、世話の原理が行われたと見ることはできないためである。世話の原理が互惠的な性格を欠如し、世話の役割が女性にだけ押し付けられ、犠牲が要求される時、安息所としての家庭は破壊される。安息所としての家庭の価値を一方向的に強調するのではなく、出産と養育と世話を夫婦、家族構成院が分担し、さらに社会がこれを制度的に後押しできる時、家庭は真の幸福と平和の基地になり、真の家庭になるのである。

文鮮明先生は、“相手のために生きていくという原則を信じて実践する人生”を家庭はもちろん社会、国家、世界までも実践するならば、平和と自由、幸福の社会、国家、世界が成る、とおっしゃった。私的領域たる家庭の世話の倫理と公的領域たる社会の平等と正義の倫理が真の家庭思想を通して、真の愛の倫理で統合されなければならない。

先生が主に主張した真の家庭を通した平和世界の実現は、家庭という私的領域に限定されて実践されてきた真の愛の倫理を、家庭を越えて社会に拡大して実践する時にだけ成り立つことができる。すなわち家族/親族/学縁/地縁など集团的利己主義の壁を越えて、人種と国家、宗教と文化が異なる世界の人々を兄弟姉妹のような家族と感じて、世話の倫理と正義の倫理を共に実践しなければならないのである。

#### IV. 結論

家族の実際生活と理想の間には距離が存在する。私たちの社会でメディアが標榜する幸福な家族のイメージは私たちの家族の中では実際には具現されないというのである。一部では幸せな家族、調和がとれた家族関係に対する強調がむしろ現実的な家族に対する失望をあげ、緊張と衝突をもたらすという批判を提起する。ステレオタイプ化された家庭を強調することが多様な姿で生きていく家庭を疎外させる、また別の暴力になったりもするというのである。このような批判の前で‘真の家庭を通した平和世界実現’というメッセージは、新保守主義が強調する家族主義と特に相違しないと誤解されることがあり得る。しかし文鮮明先生は、真の家庭は私たちが習慣的に生活してきた家庭とは根本的に異なる家庭であることを明らかにしている。

本研究では平和世界を実現することのできる姿を家庭に関する色々な見解を

分析しながら具体化した。文鮮明先生が主張された真の家庭主義は、神様が人間を息子娘として創造されようとした創造理想を具現することで神様の分性たる男性と女性が水平的に平等な人格体として会って、真の愛を授受し、真の家庭を作るというものである。男性と女性が平等な両性平等的家庭で家父長的家庭とは差別化される。

また家庭は社会と国家や世界を成し遂げる根幹であり、正義の倫理と世話の倫理が共存する。このような家庭において子供は平等で民主的な人間関係と愛を体恤することができるようになるのである。一緒に家庭で体恤するお互いのためである真の愛の倫理は家庭の枠組みを越えて、社会、国家、世界へ拡張される。人種と国家、宗教と文化の壁を越えて、全世界の人類を家族として愛することができる時、平和が実現されるのであるが、これを体恤する最も早い方法は超宗教・超国家祝福結婚である。

このような真の家庭主義の土台になるのは、為に生きる真の愛主義である。利己的な個人、家庭、社会、国家、世界では決して幸福な家庭、平和な世界を成すことはできないのである。私より家庭を、家庭より社会を、社会より国家を、国家より世界のためという真の愛の心を持って実践する時、平和な世界を実現することができるのである。

このような変化は教育を通した一人一人の変化とともに、教育と制度を並行するようにしなければならない。今後、真の家庭主義を土台として、家庭の真の愛の倫理が社会に拡張すると同時に、社会の正義の倫理が家庭にも定着できるように具体的な制度研究が要請される。

## 参考文献

- カン・ナムスン. 『フェミニズムとキリスト教』. ソウル:対韓キリスト教書会, 2002.
- カン・ナムスン. 『フェミニスト神学』. ソウル:韓国神学研究所, 2004.
- カン・ソンミ, キム・ギョンヒ, 他. 『家族哲学』, ソウル:梨花(イファ)女子大学校出版部, 1997.
- クン・ミンホ. 『東アジア発展と儒教文化』. 光州: 全南大学校出版部, 2007.
- キム・ミンジ. 「青少年純潔価値観定立のための父母教育に関する研究」, 『言葉と神学』 第19集 (2014).
- キム・ミンジ. 「儒教の陰陽論と統一思想の男女理解に関する研究」, 『統一思想研究』 第8集 (2015).
- キム・ソンヨン, キム・ヒョジョン. 「中学生が知覚した父母の養育行動と家族機能が性役割正体感に及ぼす影響」. 『Family and Environment Research』 第51巻3号 (2013).
- トゥランノ父親学校運動本部編. 『父親学校 10 周年史』. ソウル: 父親学校. 2005.
- パク・キナム. 「専門職女性の労働経験と世話人のジェンダー化」. 『フェミニズム研究』 (2007).
- パク・キナム. 「家庭暴力: 家族間殺人と判決文の中の家父長的イデオロギーを読む」. 『韓国公安行政学会報』 第52号 (2013).
- ソ・ガンデ. 宗教研究所編. 『韓国女性宗教人の現実とジェンダー問題』. ソウル:ヨンドン, 2014.
- 世界平和統一家庭連合. 『平和経』. ソウル: 成和出版社, 2013.
- 世界平和統一家庭連合. 『天聖經』. ソウル: 成和出版社, 2013.
- アンソニー・ギデنز. ファン・ジョンミ訳. 『現代社会の性・愛・・・エロティシズム』. ソウル: セムルギョル, 2001.
- イ・ジェギョン. 「現代家族の反社会性」. 『哲学と現実』 (1994年秋号).
- 梨花人文科学院. 『ジェンダーと脱境界の地形』. ソウル: 梨花女子大学校出版部, 2009.
- チョン・テヒョン. 『多元主義時代と代案的価値』. ソウル: 梨花女子大学校出版部, 2006.
- チョン・ドウオン. 『韓国の保守斜面に立つ』. ソウル: 蝶々の滑走路, 2011.
- チェ・ビョンファン. 「統一思想の人間観」. 『統一思想研究』 創刊号 (2000).
- 韓国女性研究会. 『女性学講義』. ソウル: ドンニョク, 1992.